

氏名・(本籍地)	安井光洋(千葉県)
学位の種類	博士(仏教学)
学位記の番号	甲第107号
学位授与の日付	平成28年3月15日
学位論文題目	初期『中論』注釈書の研究
論文審査委員	主査 元山公寿 副査 種村隆元 副査 斎藤明

安井光洋氏 学位請求論文審査報告書

「初期『中論』注釈書の研究」

論文の内容の要旨

本学位請求論文は二つの目的をもつ。Nāgārjuna の著作 *Mūlamadhyamakakārikā* (MMK)への注釈書の中で、最初期の注釈と考えられている *Akutobhayā* (ABh) は、Buddhapālita による注釈 *Buddhapālita-mūlamadhyamaka-vṛtti* (BP)、Bhāviveka による注釈 *Prajñāpradīpa* (PP)、および Candrakīrti による注釈 *Prasannapadā* (PSP)と続く後代の MMK 諸注釈書の中に、書名への言及なしに数多く引用され、それらの注釈の下地となっている。このため本論文は、それら注釈書において ABh がいかに扱われているかを丹念に辿ることにより、中観派における ABh の位置づけを明らかにすることを第一の目的とする。さらにまた、その過程で浮かび上がってきた、この ABh と内容的に密接な関係があると考えられている青目釈『中論』(『青目注』)が、他の注釈書と比べ、ABh と独特な関係にあることに着目し、『青目注』を ABh と比較検討することにより、その独自の解釈の淵源を探ることが第二の目的である。

まず、第一の目的である中観派における ABh の位置づけを探るため、第一章では「MMK 諸注釈書における ABh の引用と位置付け」と題して、MMK 諸注

釈書の中で共通して ABh の記述が引用あるいは援用されていると目される箇所を精査し、その扱い方の特徴を考察している。とくに、諸注釈書において ABh が共通に使用ないし踏襲されている場合、ABh で特定の語彙が列挙されるものが、ABh 以外の注釈書でも同様の語彙が列挙されている例と、ABh での特殊な偈頌の用い方などの注釈上の手法が、他の注釈書でも適用されている例が確認されるため、これらの特徴に焦点を当てながら考察を加えている。これにより著者は、とくに他学派の教理を注釈する場合に、他の注釈書が ABh の語彙や注釈上の手法を踏襲している傾向が大きいことを指摘する。さらに、それらの適用の仕方も、単に前例を踏襲するのではなく、しばしば注釈者の意図による取捨選択や改編がなされている事実とともに、その背景を明らかにしている。また、その中でも『青目註』のみが、この共通点を全く見せないが、例外的に MMK 第 1 章第 2 偈および第 3 偈に対する解釈と位置づけについては、ABh と『青目註』は一致しており、偈の順番を入れ替えている他の注釈書よりも、この ABh と『青目註』の両者の方が MMK の原典に近いことを明らかにしている。このような綿密な考察により本章は、BP 以前に ABh は現在の形でほぼ成立しており、それを BP 以降の注釈書が参照していたことを論証している。

続く第二章は、BP 以前に成立していた ABh では、現行テキストに見られる譬喩が存在しなかったという Huntington の仮説を検証するため、ABh の譬喩表現の特徴を挙げ、それが後の諸注釈書で用いられているかを検討する。この検討によって、ABh と同じ譬喩が BP 以降にも共通に用いられている例があることを実証し、譬喩表現の附加など、若干の加筆はあったとしても、遅くとも BP 以前に ABh が現行のテキストに近い形で成立していた可能性が高いと結論する。

続く第三章では、MMK の偈頌を反論者の主張とみるか、Nāgārjuna の主張とみるかについて、それぞれの注釈書における解釈の相違を考察している。これにより著者は、ABh によって反論者の説として比定された内容は、ほぼ例外なく BP 以降のインド成立の注釈書でも踏襲されている点に注目する。そして著者は、それぞれの注釈者がさらに反論者の部派名や人物名を特定することなどを加えてはいるが、ABh が MMK 解釈の淵源となっていることを実証する。加えてまた、この反論者の想定についても、『青目註』のみが独自の解釈を行っており、その理由が鳩摩羅什による漢訳上の方針に基づいている可能性があることを指摘する。

続く第四章以降は、『青目註』の独自性を論究する。まず、第四章では涅槃と戲論についての『青目註』の特徴的な解釈に焦点を当て、同注が MMK の涅槃の解釈を、ABh に基づきながらも、羅什の「諸法実相」という思想の上に立脚することで、MMK の偈頌を「生死即涅槃」といった肯定的な表現に改めて注釈

していることに注目し、考察を加えている。また、戯論に関しても、『青目注』がパーリ文献にも見られる解釈を援用しながら、他学派の説く教理を「戯論である」として排斥する形で戯論を用いる点に特徴があることを実証している。

最後の第五章では、この『青目注』と ABh の他に、羅什訳の『十二門論』を加え、これらの内容を検討することにより、『十二門論』と比較して、『青目注』には言葉に関する言及が多く、空の思想を言語化する危険性を考慮しながら、問答において否定すべきものを「戯論である」とか「言葉があるのみ」といった形で否定することにより、空の論証を行っている点を指摘している。

以上の考察を通して、ABh の成立に関しては、遅くとも BP の成立以前には現行テキストの内容がほぼ完成していたと結論する。そして、その書名がとくに明示されることなく他の諸注釈に使用されていることから、ABh が、MMK を解説するための講義ノート、あるいは覚え書きのようなものではなかったかと推定する。さらに『青目注』の独自性に関しては、ABh がインドから西域を経て羅什に伝わる過程でできあがったもので、その過程においてさまざまな加筆や訂正がなされたこと、またさらに、漢訳する際に、偈頌を分割して注釈することは行わないという羅什の翻訳方針や、「諸法実相」という羅什独自の思想に基づいて増広・補訂がなされた上で漢訳されたものと推定している。

本学位請求論文は、資料篇として ABh の校訂テキストを付している。ABh の校訂テキストに関しては、Huntington によるものが発表されているが、これはチョネ、デルゲ、北京、ナルタンの四種を参照したものである。本論に付した校訂テキストでは、この四種の版本に、敦煌出土チベット語文献に伝わる Stein collection No.637 を加えて再校訂している。

審査結果の要旨

本学位請求論文は、チベットの伝承で Nāgārjuna の主著 Mūlamadhyamakakārikā(MMK) への自註と伝えられてきた Akutobhayā(ABh)の成立と、その中観派における位置付けを明らかにしようとしたものである。これまで、ABh に関しては、後の MMK 注釈書で、ABh という名称どころか、引用であることを明記することすらなく使用されていることなどから、その成立問題について、さまざまに論じられてきている。しかし、これらの論考では、ABh 以降に成立したと考えられている MMK 諸注釈書すべてにわたって、ABh の引用を精査したものではなかった。その中で、MMK の諸注釈書すべての中で ABh の使用例を精査した上で、ABh の中観派における位置付けを探ったことは高く評価できるであろう。

しかも、本論文の論究で、後の MMK 諸注釈書に共通して ABh が使用されている例などを丹念に挙げて、Buddhapālita による MMK の注釈(BP)の成立以降

に ABh が成立したのではないかという指摘に対して、Huntington の ABh の段階的成立説という仮説によりながら、やはり ABh が BP 以前に、ほぼ現行のテキストの形ができていたことを論証したことは評価できよう。ただ、この ABh が BP 以前にほぼできあがっていたという結論は、BP 以降にも、ABh の加筆、訂正が行われた可能性を否定できていない。さらに、その結論も、後の諸注釈書に共通して使用されている例と、ABh で用いられている譬喩表現の影響、及び反論者の想定での ABh の影響に基づくもので、BP 以前に成立していた ABh が、どのようなものであったかを探るためには、BP の内容との徹底的な対比が必要であろう。本論文が、後の注釈書すべてに共通して使用されている例から論じようとする視点は理解できるが、ABh と BP との対比をする視点がなかったことが惜まれる。

また、結論として、ABh が、MMK を伝承していく過程で、講義ノート、あるいは覚え書きとして伝えられてきたものであった可能性を指摘しているが、これは ABh が、Huntington の BP や青目釈『中論』（『青目註』）の crib(虎の巻)であったとする視点と共通するもので、書名も引用であることも記すことなく使用されていることを考えると、一考に値する視点であるといえよう。ただ、この場合、伝承者によって、それぞれの講義ノートがあったことが推測されるため、複数の ABh 原本が存在したことになる。そうすると、それが何時、どのようにして一つにまとめられ、現行のテキストの形に編纂されていったかを検討する必要があるであろう。

しかし、本論考によって、講義ノートであったとしても、ABh が、後の MMK 注釈書のなかで共通して使用されている場合、MMK の反論者の想定も含めて他学派の教理を注釈する場合に、それぞれの注釈者による加筆や訂正を加えながら、使われていることを明らかにし、それによって、ABh が、後の MMK 注釈書の解釈における淵源となっていることを明らかにした価値は高い。

また、こうした検討を通して、インド成立の MMK 諸注釈書と一線を画しながら、なお ABh に緊密な関係がある『青目註』が、インドから西域を経て羅什の手に渡る間に青目による作であるとされ、ABh が講義ノ特的な性格であったことから、その間にも、加筆、訂正がなされていた可能性を指摘した価値は高い。『青目註』が、ABh をもとにした羅什の漢訳であるという想定を完全に排除できていないが、羅什の手にした原本時点で、ABh 原本が変わっていた可能性を指摘している点は高く評価できよう。また、羅什の加筆、訂正に関する視点を、羅什の漢訳方針や、諸法実相などといった羅什の思想による可能性を指摘したことも評価できよう。ただ、『青目註』における羅什の加筆、訂正を論じるにあたって、羅什の思想を問題にするとき、『青目註』と『十二門論』だけでは不十分であることはいうまでもなく、今後、羅什の他の翻譯なども視野に入

れて、『青目註』の羅什による加筆、訂正部分の抽出がなされることを期待する。

さらに、本論文に資料篇として提出されている **ABh** の校訂テキストに関しては、**Huntington** による校訂で使用された北京版などに、敦煌写本を加え、新たに校訂した価値は高く、今後の学会に大きく寄与するものと思われる。

以上のように、本論文は、いくつかの問題はありながらも、緻密な文献学的手法を用い、**MMK**諸注釈書を網羅して、初期中観派の思想に新たな視点を提示していると共に、**ABh**の校訂テキストを通して、今後の学会に大きく寄与するものと思われ、学位論文として十分に評価できるものである。